

国際化と暮らし

インタビュー

中村健夫さん(仮名)

韓国出身
34歳
保土ヶ谷区在住

■ 私は自分が韓国人であるということ、差別を受けたこともあまりないですけど、地域性なのかも知れませんが、

■ 関西に、おじいさんの兄弟とか、従兄弟が結構いて、日本の方と結婚しているんですね。でも、あまりうまくいかなかったケースが多いですよ。そういうこともあったものから、父や母も、私が結婚して帰化することには、とても心配していました。私は日本で育っていないし、相手の人がどういう生活をしてきている人なのか、全然わからないわけでしょう。ご両親はどういう人で、どんな家庭かも知らない。だから、向こうの父も心配で、叔父に電話をして、ちょっと調べてくれるように頼んだこともあつたんですけども……。

■ ふるさとへは二時間とか、二時間で行けるけれども、国は違うわけですから、当然、家族は心配でしょうね。まして、差別も社会から消えているわけではないのですから。でも、今は、全然平気ですよ。一緒にいて、みんなにあいさつもするし、大丈夫です。

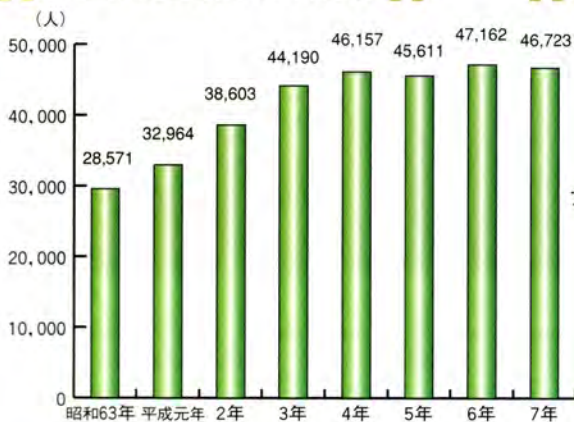
国際交流の窓口

外国人との交流会、外国文化を学ぶ講座、語学教室、支援活動などの情報をご案内しています。また、外国人のための生活相談も行っています。

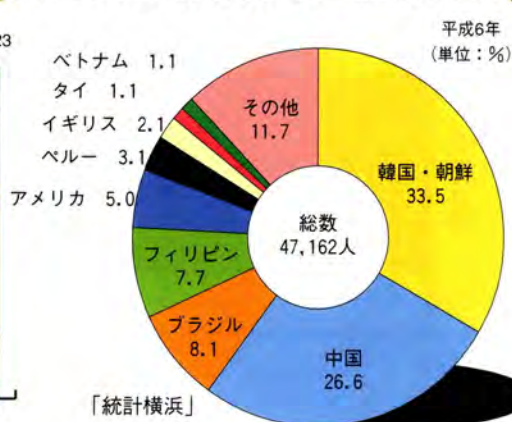
- 横浜国際交流ラウンジ情報コーナー Tel.671-7209/FAX671-7187
中区山下町2産業貿易センタービル3階 横浜市海外交流協会内
関内駅(JR・地下鉄)徒歩15分
- 青葉国際交流ラウンジ Tel.971-2040/FAX971-0260
青葉区藤が丘1-14-95藤が丘地区センター内
藤が丘駅(東急)徒歩5分

- 保土ヶ谷区国際交流コーナー Tel.337-0012/FAX337-0013
保土ヶ谷区岩間町1-7-15岩間市民プラザ内
天王町駅(相鉄)徒歩2分
- 港南国際交流ラウンジ Tel./FAX848-0990
港南区上大岡西1-6-1ゆめおおかオフィスタワー13階
上大岡駅(京急・地下鉄)隣り
- 神奈川県国際交流協会 Tel.671-7070/FAX671-7049
中区山下町2産業貿易センタービル3階
関内駅(JR・地下鉄)徒歩15分

外国人登録人口推移



外国人登録者数の国籍別内訳



・外国人登録者は平成三年まで毎年急増傾向、平成四年以後は千人以内の微増減を繰り返している。
・国籍別では、韓国・朝鮮(三三・五%)、中国(二六・六%)、フィリピン(七・七%)、などアジア諸国籍が七割。

インタビュー



石井賢珠さん

日本在住12年 子ども2人
34歳 西区在住

石井賢珠さんは、仕事で韓国にきていた日本人の夫と結婚して、横浜で暮らすようになった。日本在住十二年で、すでに帰化。夫との間に男児が二人。現在は保土ヶ谷区国際交流の会の韓国語（ハンゲル）インフォメーションスタッフとしてボランティアの活動をしている。

■日本で暮らしていて不便に思うのは、言葉の問題ですね。それと、やはり寂しいですよ。親元を離れて、夫が日本人で、となると。こちらに夫の家族がいる場合は、少し違うかも知れませんが、やはり友だちがほしいと思います。同じ境遇の人たちが集まって、話し合えるような場所があると本当にいいですね。

■そういう意味では、「保土ヶ谷区国際交流の会」があるのはとても助かります。いろんな人と話ができるし、講座も開かれていますし、楽しいイベントもありますね。カラオケ大会とかディスコパーティー、たまにはハイキングとかもね。ただ、私はほかの区のこととはよくわからないのですが、こういう交流の会はまだまだ少ないと思うので、もっとそういう場所があればいいと思います。

■日本と韓国は、習慣などの面で似ていることも多いです。例え

ばお正月は、親戚が集まってずいぶんにぎやかだし、子どもにお年玉のようなものもあげるし。私が小さい頃は、お正月になると必ず、新しい服とか靴とかを用意してくれたんですよ。それがまた楽しみで。今は豊かになって、新しい服もいつでも買えるようになりましたけどね。それから、お盆もあるし、お墓参りもします。

■日本で暮らしていると、自分が韓国人だということを、中には隠している人もいらっしゃるみたいです。そこまでやる必要はないと思うのですが、やはり差別とか、あるところにはあるらしいのです。私は差別を受けたこともあまりないし、私自身も堂々と「韓国人です」と言ってきたつもりなんですけれども。

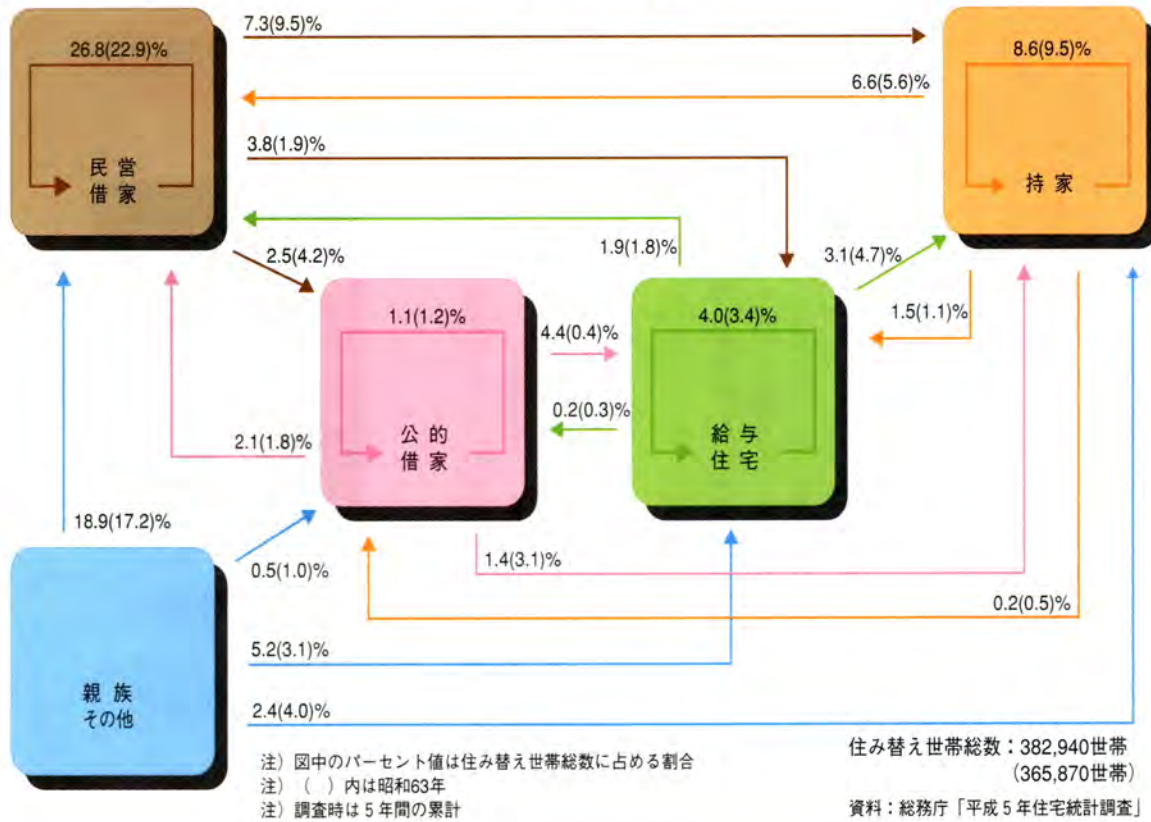
■韓国への里帰りは年に一回くらいです。主に夏休みですね。子どもを連れて行くこともあります。去年は私一人で帰ってきました。というのは、子どもたちは日本で育っていますから、言葉がうまく通じなかったり、友だちもいなかったりで、あまり楽しくないみたいなんです。

■逆に、私の親が遊びに来てくれることもあります。これまでに何度か来てくれました。私の父親はにぎやかな人だから、おかあさん（姑）とも日本語でしゃべったり、おかあさんの友だちも誘って、みんなでカラオケに行ったりとかね。家族がそろると、やはり楽しいです。

住み替えの状況 (平成元年以降に入居した世帯数)

都市「横浜」に暮らすこと

住宅・暮らし



横浜市民が、この横浜に定住したい、という気持ち、都市型居住の特徴であるマンション、その管理の問題点。高齢化社会に対応した住まいづくりとその支援、誰にもやさしいまちを目指す福祉の都市環境づくりや、震災への対策。そして、自治会活動や身近で参加するサークル、近所づきあいの傾向、増える外国人市民の方の暮らしの様子をアンケート調査の結果や実際のインタビューを紹介することによって眺めてきた。手紙につづられた思いもまた市民生活の一面である。

しかし、ここに示すように過去五年間に市内の現住所に住み替えた人の状況を五年前と比べてみると、新たに持ち家となった人は減少し、民間借家や給与住宅に住み替えた人々の割合は増加している。また、同じ民間借家で住み替えをした人、給与住宅で住み替えをした人は増えている。こうした傾向を示す統計調査だけを眺めれば、本来ならば「市内に定住したい」という意向も、経年的に低下したとしても不思議はないようにも思える。しかし、実際は微増減を繰り返しながら八割程度を占めて推測している。それはなぜだろうか。

「住宅・暮らし」に関する心配ごととは経年的に市民意識の上位を占めていることは事実であるが、冒頭で述べたように、横浜市における住宅

や暮らしのあり方は、あくまでも都市型居住のそれであり、心配であることも横浜という「都市」に暮らすことの宿命なのかもしれない。

横浜市における人口社会増は、昭和五十年代から六十年代にかけて見られたような爆発的な数字ではなくなっているが、大規模な団地や宅地の開発も今後革命的に現れることは期待できない。社会的条件から考えても持ち家、公的借家へ移行することとはやはり難しいと言えよう。もちろん、都市型居住に対する課題を解消するための施策は市の責務として実施するべきであり、本章中でもその一部を紹介している。

それでも例えば、私たちの横浜にはイメージ財産と呼ばれるものが数多く存在する。港、赤レンガ、中華街、山手の洋館、坂道、緑の丘や川の流れる風景もしかり、そしてMM地区、ランドマークタワー、ベイブリッジ：歴史、自然、生まれ変わる近代的な街並み、それらをお互いが共有の財産として、あたかも精神的な支柱として感じられることが、この横浜に住む私たちにこの街への愛着と、そしてそれを思う者どうしのある種の連帯感を育んでくれているのではないだろうか。

横浜に暮らすこと、そのことに誇りが持てるということはすばらしいことである。